

オンライン授業での日本語文法史

—テキストベースでの「係り結び」の講義—

西田隆政（甲南女子大学）

1 はじめに

今回まとめたものは、オンライン授業での試行錯誤の一例を記録するものである。インターネットでの授業環境が十分に保証されない状況下では、さまざまな試行があり、それ自体が今後の授業形態を改善する一助と考えている。

2020 年度前期の甲南女子大学の授業は原則オンラインとなった。大学と教員の側以上に、学生の側に十分な受講環境も整わない状況もあった。ZOOM などによる同時双方向や画像配信の授業が困難な場合もあった。そのような中で、一つの方法として、テキストベースの授業形式も模索されることとなった。

ここでの日本語文法史、「係り結び」の授業は、そのようなテキストベースの授業の試行の一例としてあげるものである。

2 具体的な授業方針と方法

この授業は、日本語日本文化学科で「日本語の歴史」として、3年生に提供されている講義科目である。国語科の教員免許や日本語教育の課程のための、選択必修の科目でもある。

2020 年度は、日本語の文法史を中心とした授業として開講した。授業の当初には、日本語の歴史の流れと日本語の音韻史について概説を行っている。

教科書としては、青木博史・高山善行編『ガイドブック日本語文法史』（ひつじ書房・2010年）を使用している。対面での授業では、この教科書を使用して、教室で黒板への板書を併用しながら、要点の説明を行っていた。

オンライン授業では、教科書を使用した際でも、そこにどのような対面での授業に代わるものを提供するかが問題となる。方法としては、今回は授業での口頭や板書による説明の代わりとして、口語体のテキスト資料を配布することにした。形式は PDF とした。

急遽のオンライン授業実施の要請、また、学生の側でも映像資料や音声資料のスムーズなダウンロード等の困難な場合があり、活字資料の使用というテキストベースのオンデマンド形式でのオンライン授業の実施となった。

基本となる、授業内容は教科書に整理されているので、配布する資料は、それへの補足に徹するものとした。分量についても、無意味に長くなることは避けることを考えた。ただ、それでも分量は少なくはならず、毎回 6000 字から 7000 字程度の配布資料を作成することとなった。

配布資料の形式は、教員の側から問いかけを行い、それに対して学生がワークシート方式で解答を考えて、資料を印刷すれば、空欄に書き込めるようにした。実際には、印刷する学生は少数であったが、考えさせることで理解の深まりのあることを考えた。

問いかけの解答は、その直後に記述した、わからなければ、答えを見て確認が可能なようにした。毎回、問いかけとしての設問は 30 近く作成して、学生には手間をかけて勉強してもらうことを意図した。

教科書を手元において、それを読みつつ、資料を丁寧に順次読みながら解答を進めていくと、90 分程度はかかる想定で作成した。しかし、実際には、手を抜いて適当に進める学生も多く、その点はテキストベースのオンデマンド授業の限界と考えている。

3 毎回授業の課題について

授業の課題は、教科書と授業資料の全体を丁寧に見たうえで、作成できるものと考えて、出した。また、前回の授業課題の解答例と教員のコメントを別資料であげているので、それへの意見も書いてもらうようにした。

300 字程度ということで課題は出したが、何とか 300 字書いた者から、1000 字以上にわたって小レポートのように書いた者もあり、受講生の取り組む差異が出るのは致し方ないことであった。

4 「係り結び」の授業について

「係り結び」については、多くの高校の国語科では、文末の活用形が変化する助詞であること、「ぞ」「なむ」「こそ」が「強調」、「や」

「か」が「疑問」ということが教えられているだけであり、より深い段階の問題は、大学で初めて学ぶことになる。ただ、「ぞ」「なむ」「こそ」の相違点については、高校生でも疑問を持つ者もあり、教える側としては知識として知っておくべきところである。

それらの点に配慮して、国語科の教員や日本語教師を目指すものとして、どのような点をさらに学ぶ必要があるのか、という点を、受講生たちには意識できるように、工夫を行った。

4 授業資料について説明

以下に、実際の授業の際に、大学の学生への授業資料配布システム（campus square）を使用して配布したものを上げている。

なお、本来は A4 サイズであげたものを、A5 サイズにして掲載しているので、多少レイアウトを変更している。しかし、内容については、そのまま踏襲したものである。

5 おわりに

今回の試みは、オンライン授業として理想的なものと言えるものではない。しかし、状況によっては、オンデマンドで実施するしかない場合もあり、そのような試みの一例としてここにあげた。

この程度の資料ではあるが、やはり、作成には毎回 5、6 時間程度はかかることになった。教科書を読みなおし、もう一度資料をチェックする作業と入力作業は、非常に時間と労力を要するものであった。

内容面でも、読み返すと説明不足や必ずしも適切ではない例をあげているなど、修正が望ましい点もあったが、今回は時間のない中で資料作成した例として、そのまま掲載している。

結果として、15 回で 6000 字平均とすると、合計 90000 字となり、教科書にするとしては分量の多すぎるものとなった。対面式授業で伝えていた情報量の多さを改めて確認することにもなった。

200612 第 8 回日本語の歴史授業資料

第 6 回と第 7 回で「モダリティ」について検討しました。日本語においては、助動詞の形はすっかり違ったものになっていますが、基本的な機能は、古代語と現代語で、それぞれ**対応する助動詞が存在**します。これは、何を意味するのでしょうか。

()

歴史に**連続性**があるということですね。決して、断絶しているわけではありません。これは、歴史を見る上で、重要な視点です。たとえば、日本人の**髪型の歴史**を考えると、どうでしょうか。皆さんのイメージはいかがでしょうか。

()

やはり、これは断絶がありますね。「散切り頭を叩いてみれば文明開化の音がする」という有名なことばがあるように、明治時代に大きく変化しました。江戸時代以前と現代とでは、髷（まげ）を結う時代と髷の基本ない時代で、まったく違います。（これも面白い例でして米田先生のゼミなら卒業研究で調べられます）光源氏も髷を結っているのですよ。

さて、第 8 回からは、「**係り結び**」を取り上げます。皆さんも**高校の古文**でやりましたから、記憶にあるはずですが、第 8 回は、基本説明と「**強調**」の係り結びを説明します。

1 係り結びとは：文末の活用形が変わることよりも大事なこと

テキスト 83 ページから、第 8 章係り結び、です。まず、定義の説明です。「文は通常の場合、終止形で終止します。しかし、**文中に特定の助詞があると、連体形や已然形で終止**します」（1 行目）と説明されます。これは、皆さんも記憶にあるところでしょう。

ところで、なぜ、この係り結びが古文を学ぶ上で、非常に**重要な事項**として、教えられているのでしょうか。皆さんは、理由がわかりますか。

()

そうですね、**現代語にない現象**だからです。知らないと変な感覚になりますね。ただ、現代語でも、**前にくることば**によって、**文末の形が決まる**という現象はないことはないのです。何か知っていますか。

()

陳述副詞を思い出した人は優秀です。教職や日本語教員を目指す人には、わかってほしいところです。「まるで～ようだ」「もし～なら」「全然～ない」など、いくつもあります。

そして、1つ助詞の例があるのです。皆さんは覚えていますか。

()

「朝はコーヒーしか飲まない」の助詞「しか」を覚えていますか。これは不思議なことに「×コーヒーしか飲む」とは言えませんね。(ただし、和歌山県の方言では「酒しか(の方が)好き」のような肯定表現もありますが)

とすると、何らかの語があれば、文末の形が決まるということ自体は、日本語では例がないということではないのです。これは知っておきたいことです。

さて、定義の2行目から「係り結びは古代語特有のもので、古代語と近代語を考える上で重要なテーマ」とあります。しかし、何がポイントなのか、十分に伝わらない文です。なぜそうなるのか、わかりますか。ここは大事なところで、高校の授業で係り結びを勉強しないと古文は読めません。ただ、係り結びについて、ぼやっとしたイメージしかないのでは。

()

具体的なテーマと言っておきながら、どのように重要なのか、どの点が重要なのか、説明がされていないのです。なぜ、このような漠然とした言い方になるのでしょうか。

()

理由は簡単です。まだ、研究がそこまで進んでいないのです。ですから、詳細な説明がしにくいのです。ほぼ確実に言えることでないと、高校の教科書には載せられません。また、大学のテキストでも明確にこうだと言いついて説明できません。

今回の授業資料では、その点を4行目「「ぞ」「なむ」「こそ」「や」「か」という係助詞の機能を中心に解説していきます」。ところで、「中心に」とわざわざ言うのは、なぜなのか。

()

ここは大きな問題なのですが、係助詞は、本当は上の5つだけではないからです。係り結びという形態変化を伴うのは、5つですが、形態変化のないもので、「係り」を形成する助詞があるということなのです。それは何でしょうか。ヒントは90ページです。

()

助詞「は」「も」がそれに該当します。しかし、これについても、さまざまな考え方があり、現代語の学校文法では、これらは**副助詞**に含まれることが多いのです。

1 基本例の確認：知識の再整理

83 ページの基本例には、5 例があがっています。まず、a は「花ぞーにほひける」、b は「今日こそーかぎりなめれ」、c は「読むなむー悲しきことなりける」の 3 つです。

これらの意味は、何となく覚えていますね。現代語訳をヒントに考えてください。

()

a「ぞ」は「花は昔と変わらず素晴らしい香」、b「こそ」は「今日という今日が」、c「なむ」は「その宣命を読むのは」とそれぞれあります。もし、係助詞がなければ、太字のところが不要となります。太字があることで、現代語訳は、どのように変化しているのでしょうか。

()

係助詞の接続する語に対する説明が付与されて、それが「**強調**」されていることがわかるのでしょうか。ここで、注意したいのは、「**強調**」されるのが**係助詞の接続する語**ということです。この点は、高校では、あまり教えられていないところです。注意しておいてください。

さて、c だけ、「なむ」があるのに、「なむ」がないのと同じ訳に見えますね。これには、どんな意味があるのでしょうか。

()

そうなのです。「ぞ」や「こそ」と違うところがあるのです。これは、また、あとで説明します。単なる「**強調**」ではないということになります。

次に、d「山かー近き」、e「恋しくやーある」の「や」と「か」です。これらも、現代語訳もヒントに、どのように変化しているか、考えてください。

()

d は「山が天に近いか」、e は「恋しくお思いになるか」です。ここで気の付くところはありませんか。

()

そうなのです。**疑問の意味**なのはわかるのですが、疑問の意味を示すはずの助詞の位置が**文中から文末に移動**しているのです。ここが、古代語と近代語や現代語との大きな違いです。現代語訳をして、文の意味を理解することは可能なのですが、疑問という文の大事な意味の示し方が変化しているのです。これについては、各助詞の項目で説明します。

2 係り結びとは：再確認

83 ページの下から 1 行目から説明があります。すでに、最初に説明していますが、協調の「ぞ」「なむ」「こそ」と、疑問の「や」「か」があり、これらがあると、文末所述語が、終止形から連体形や已然形に形を変えるわけです。

84 ページ 3 行目の表に整理されているとおりです。この表を見て、何か気になってくることはありませんか。この疑問を持つ、というのが人間の重要な能力の 1 つです。

()

いくつか、あげてみましょう。1 つ目は、**なぜ連体形で結ぶのか**、ということです。この説明は次回にわかる範囲まで、試みてみます。ただ、まだよくわかっていません。

2 つ目は、**重なり**があるのではないかと、ということです。連体形で結ぶ「強調」に「ぞ」と「なむ」があり、連体形で結ぶ「疑問」にも「や」と「か」があります。これは気になるところです。皆さんは、どう考えますか。

()

基本的にほぼ同じ意味の語が **2 つ以上**あるときは、何らかの**意味の違い**があると考えられます。もう 1 つの可能性は、時代的にずれて使われたのではないかと、ということです。

たとえば、「きれいだ」と「美しい」だと、「美しい」の方がやや硬い言い方で、なおかつ余程でないと感じにくい感じですが。皆さんは、「あの指輪、()」なら、どちらを使いますか。

()

普通は「きれい」を使いますね。「美しい」だと気取っていたり、本当にうっとりしたときに使いそうな気がします。

また、歴史的な例としては「乳母車」と「ベビーカー」などもそれに該当します。やはり、今あるのは「ベビーカー」であって、「乳母

車」は皆さんの生まれる前ですね。

この複数あるというのには、まだ解明できていない点も多いのですが、ある程度の理由はわかっています。その点は、各項目で説明をします。

3つ目は「こそ」の問題です。已然形で結ぶところも含めて、他とは違うもののようです。単に「強調」の係助詞の1つというだけではなさそうです。

p84の表の下にあるよう「係り結びについては十分に解明されたとはいえず」とあります。ですから、まだわからない点もありながらも、高校時代よりも、もう一步踏み込んで、皆さんには、係り結びについて、学んでいただきたいと考えています。

3 強調の係り結びⅠ：「ぞ」と「なむ」

84 ページ下から9行目「ぞ」が付く語句は、文中で特に強調する部分であることが多い」とあります。特に強調する部分に「ぞ」が付くのはわかりますね。問題は「であることが多い」と言っていることです。これにも意味があります。わかりますか。

()

これは、そうではない例もあるということですね。たとえば、「額髪は少し短うぞあめる」(源氏物語・葵)は、「額の髪は少し短くてあるようだ」と訳せますが、このような場合は「短い」という形容詞を強調しているというよりは、文全体で「少し短い」という説明になります。形容詞につくような場合は、名詞とは少し使い方に違いのあることもあります。

具体的に例の説明をします。下から7行目(1)「鶯ぞ鳴く」は、非常にわかりやすい例です。強調する名詞に「ぞ」が接続しています。しかし、問題もあります。何でしょう。

()

そうなのです。現代語訳に反映しにくいのです。強いて何かつけるのなら、「花が咲かないので気持ちの乗らない春を代表する鳥である鶯」となりますが、そんなことは平安時代では常識なので不要な訳です。とすると、もう1つ問題に気づきませんか。

()

そうなのです。「強調」というだけでは、係助詞「ぞ」の説明にならないのです。これについては、次の「なむ」とも合わせて考えていきます。

(2)「夢のやうにぞありける」は、「全く夢のようであった」と「夢

のよう」を強調するために「全く」という副詞を補って訳しています。何か気づくことはありません。

()

「少し短うぞあめる」と似ていませんか。そうなのです。名詞ではなく、連用修飾をする「形容詞」などに接続する「ぞ」は、確かにここで、朧月夜に逢えた光源氏が夢のような気持ちであることを強調しているのですが、それは語句であるものの、文全体にも通じるところがあるのです。このあたりも検討課題となります。

下から3行目に、係助詞「ぞ」についてのポイントの整理があります。①結びの省略されることが少ない、②文末に使われることがあり、平叙文や疑問詞疑問文の例がある、とあります。疑問詞疑問文というのはわかりますか。

()

「いかに」(方法)「誰」(人)「いづこ」(場所)「いつ」(時間)のような、具体的に尋ねたい疑問の部分特定する、語の使用される疑問文です。この文末での使用があるというのが問題点ともなります。

それと、ここには書いていないのですが、「ぞ」は、普通の(1)の和歌だけでなく、散文にも幅広く使用されます。この点からすると、基本となる「強調」の係助詞ということにもなります。

それに対して、「なむ」はどうでしょうか。85ページから「なむ」の説明です。まず、和歌にあらわれにくく、とここで、「ぞ」との違いが明確になります。汎用性のある「ぞ」に対して「なむ」の散文だけと使用範囲が限定されるのです。しかも、時代は中古、平安時代だけで、係り結びの中でも、最も早く消滅していったのです。

4行目(3)は「～ほどになむ—絶えはてたまひぬる」で「～ほどに、亡くなってしまわれました」と訳されます。「ぞ」との違いを感じませんか。

()

そうですね。「なむ」の接続する語句の「強調」されているという感じが「ぞ」ほど明確ではないのです。(4)「光にてなむ」のように、結びとなる述語が存在しない例(言いさし文)も多いのです。なぜ、このような特徴があるのかを、あとでまとめて考えてみます。

そして、11行目から「なむ」のポイントです。「結びの述語」が省略されることが多く、「ぞ」と違って推量系の助動詞が結びにくることもありません。そして、文末用法もないとされます。ここからどのようなことが考えられるのでしょうか。

()

「なむ」は使うところや使い方に**限定が多い**、ということです。それなら、なぜ、平安時代にある程度使われたのでしょうか。次は、それを「ぞ」「なむ」を比較しながら考えます。

テキスト 90 ページに「ぞ」「なむ」「こそ」の**違い**という説明の部分があります。まず、共通点として、2 行目「それらに**前接する要素を強く指示して、文全体に強調**のニュアンスを付け加える」とあります。これは、今までも説明してきたところでは。

具体的な違いについては、6 行目からの表に注目してください。特に、近藤泰弘氏の説明が重要です。ぞ「**卓立の強調**」なむ「**卓立+聞き手への呼びかけ**」とあります。この「卓立」とは何なのでしょう。

()

「卓立」とは、文の中で特に「**取り上げて指示する**」ということです。「ぞ」については、これである程度理解できます。文の中にある語句の中で、この部分が特に重要だと話し手が考えているということになります。

一方、「なむ」はどうでしょうか。「聞き手への呼びかけ」というのは、語句を卓立はするものの、それ以上に、話を聞いている相手である聞き手に、何らかの働きかけをしようとしていることになります。

さきの 85 ページの (4) の例では、文末の述語を示さずに、「**畏れ多いお言葉を光にしまして（読ませてください）」**と相手（桐壺帝の名代の女房）への桐壺の更衣の母（光源氏の祖母）の「**畏まっている気持ち**」を表現しようとしています。ここでは、光源氏の生まれたあと母親の桐壺の更衣は死んでしまっています。

とすると、「なむ」の働きは「**強調**」というよりも、**聞き手への働きかけ、訴えかける**ような言い方ということになってきます。

ここから少し難しい話になりますが、**平安時代の物語文学の語り**の文には、「**—なむ—ける**」のような例が多数あります。これは、物語の語り手が、物語のお話の聞き手である読者に対して、語りかけるように、話を伝えていくというスタイルにもつながっています。

このあたりは、西田自身の研究テーマでもありまして、説明することは数多くあります。興味のある方には、個人的に説明してみたいと考えています。

高校時代は、「ぞ」と「なむ」とともに「**強調**」で連体形終止と覚えていたはずですが。それは間違いではないのです。しかし、2 つある以上、当然何らかの違いがあるのですが、まだ誰もが納得する説明ができていないので、そこで説明がとまっていました。

しかし、現状でも、「ぞ」と「なむ」には、かなりの差異があることが、わかってきています。ぜひとも、教職に就く、皆さんにはその点を知っていただきたいのです。

4 強調の係り結びⅡ：「こそ」

85 ページの後半からは「こそ」の説明です。下から7行目「他との対照の中で一つを強調する意味をもち、現代語でも副助詞として用いられている」とあります。皆さんは、「こそ」が現代語でも使用されているのを知っていますか。また、例文が作れますか。

()

「今年こそ貯金するぞ」「これこそ私の探していた宝物だ」、のような例が思いついたでしょうか。特に「今年こそ」のような例は、日常会話でも使えないことはありません。決意を示す例ですね。これがどうして「強調」になるか、説明できますか。

()

「今年こそ」というのは、「昨年」「一昨年」「それより以前」と、何年もの年があって、その**数多い年の中の1つの年**に勝負をかける！という感覚です。「今年こそ痩せる！」の例は女性の皆さんに怒られそうですから、困りますが、わかりやすいですね。

とすると、係り結びではなくなっても、現代語にも「こそ」は生き残っていることになります。この点は、あとでもう一度説明します。

85 ページの下から (5) (6) (7) と3例あがっています。(5)は、いろいろな出来事の中でもこういうことが起こると、のように多くの中から一つを選ぶ強調です。一方、(6)は逆接の関係の例(86 ページ7行目)です。これが「こそ」の起源で「生まれた国こそ違うけれど、今では一心同体だ」(7行目)のような例が、現代語にもあります。

この多くの中から、特に1つを指定して「強調」というのは、「選択強調」(10行目)とされて、便利な働きとすることができます。テキストの例以外でも、「君こそヒーローだ」「これこそ私たちが求めていたものだ」のように、現代の日常会話や文芸作品にも使えそうな例が多数あります。

このあたりが、「こそ」が今もって**助詞としての生命**を持ち、現代語にまで使われ続けている理由とも考えられます。(ただしこれも完全な説明ではありません、あくまでも想定)

ただ、この「こそ」の(7)のような例も含めて、係助詞が接続する語句を「指示して強調」という本来の係助詞の働きが明確でない例が多いのも事実です。普通に文で「強調」、それも明確に語句を指示する例が、相対的に減少することでもあります。この点については、次回に、係り結び全体のまとめとして、説明する予定です。

では、最後に課題をお願いします。

課題

①係助詞の「ぞ」と「なむ」の違いを高校生にもわかる範囲で、簡単に説明してみてください。授業のあとに質問に来た生徒に追加で説明する要領です。

②課題資料にあげた文章を読んで、自らの意見を述べてください。
* 字数は①と②を合わせて 300 字程度で書いてください。字数の多くなるのは問題ありません。

200619 第 9 回日本語の歴史授業資料

第 8 回は、係り結びの前半ということで、「強調」とされる、「ぞ」「なむ」「こそ」について、考えてきました。高校の古文の文法では、「強調」という意味とどの活用形の文末になるのか、という点が、主に教えられています。

しかし、改めて見直していくと、「強調」といっても、「ぞ」「なむ」「こそ」のそれぞれに違いがあること、使用される状況についても違いがあることが見えてきました。また、「こそ」だけは、現代語でも副助詞として使用される理由がある程度説明ができます。

第 9 回は、係り結びの後半ということで、「疑問」の係助詞「か」と「や」、さらには係り結びの成立から消滅までを考えていきます。

1 疑問の係り結び：「か」「や」

テキスト 86 ページ下から 8 行目、「か」の係り結び文は、疑問文になる、と説明があります。ここで確認です。疑問文での、真偽疑問文と疑問詞疑問文の区別はわかりますか。

()

真偽疑問文は「はい」「いいえ」のように問いが**事実か非事実か**を確認する疑問文です。一方、疑問詞疑問文は「いつ」「誰」のような**疑問の対象となる疑問詞**を使用する疑問文です。

下から 7 行目 (8) は「**今日越えるのだろうか**」の真偽疑問文で、今日山を越えるか越えないか (恋人が今日帰ってくるのか来ないのか) を問いにしています (切実です)。

下から 3 行目 (9) は「**誰が知っているのか**」の疑問詞疑問文で、桜の花を散らす風の宿 (住处) を誰が知っているのか、と、この人物を誰か探しています。

「か」は両方の疑問文に使えるのですが、いくつかの注意事項があります。まず、一つ目は何だと考えますか。現代語訳に注意してください。

()

前回も指摘しましたが、疑問の助詞の文中で**使われる場所が変化**します。**文中の語から文末**に変わっています。これが、古代語と現代語の疑問文の大きな違いです。このことは、何を意味するのでしょうか。考えてみてください。

()

疑問文であることが判明するのが遅くなって、文全体で疑問を示すようになっていきます。古代語では、(8)なら「今日」という恋人の帰ってくる大事な日がどうなのか、という**疑問の焦点**が明確にしめされるのです。

87 ページ 1 行目には、奈良時代から平安時代になるにつれて、真偽疑問文には「か」が使われなくなり、平安時代には疑問詞疑問文での使用となるとあります。

また、4 行目からは複合形の説明があります。「かも」(詠嘆)は奈良時代には多用されたが平安時代にはなくなります。どう変化したのでしょうか。

()

そうですね。終助詞の「かな」が使われます。そして、現代語でも「なあ」という形で「詠嘆」を示しています。

「かは」は皆さんご存知ですね。教職を取っている人には必須知識です。

()

これは**反語**ですね。さらに、文末の「か」の使用も徐々に増えて、疑問や詠嘆の意味を示します。「やっぱりだめだったか」は、現代でも使われる詠嘆の例です。

87 ページ 8 行目からは、「や」の解説です。「や」には、「か」とは違い問題がいくつかあります。その 1 つが、「や」には間投助詞や終助詞とされるものもあり、判別が簡単ではないことです。テキスト 164 ページを参照して見ておいてください。多様な意味があります。

係助詞「や」の意味も「疑問」です。しかし、「か」とは大きな違いがあります。87 ページの (10) (11) (12) の例を見て考えてください。疑問文の種類ですよ。

()

「や」は**真偽疑問文**にしか使えないのです。しかも、奈良時代が「か」でしたから、**平安時代**にしか「や」の疑問文は使われないのです。

さらに、もう1つの特徴として、推量の助動詞とともに使用されます。現代語に訳すと「～だろうか」とやや自問自答的な例もあります。

(10)は「**寝たから夢に出てきたくれたのだろうか**」(古代人は相手が自分のことを思ってくれているから夢に見るのだ、という都合の良い考え方をします)、(11)の「**氷を風が溶かすのだろうか**」とあります。ここからどういうことが想像できますか。

()

88 ページ 1 行目にあるように、「や」の疑問表現は現代語の疑問・質問の表現とは少し違うところがあります。真偽を尋ねて確認するというよりも、**漠然と疑問を抱く**という感覚も見て取れます。(12)の「～にや」のような例では、「～なのか」という疑いを示すような例です。

そして、このことが歴史的な問題にもつながってきます。考えてください。疑問文を示す助詞は、奈良時代は「か」で平安時代は「や」でした。現代語は何ですか。

()

現代語は「か」と**文末のイントネーションの上昇調**で示すのです。「Aさんは来ますか」「Aさん来る↑」ですね。面白いことに「です・ます」は「か」が必須で、ため口だとイントネーションで示します。「来るか」だと少々乱暴に聞こえます。なぜでしょうか。

()

これは大きな問題で、まだよい説明はついていません。方言などでは、「来るか」は普通にあるのですが、女性は使いにくいのです。これも研究テーマになります。難解ですが。

さて、88 ページ 6 行目にあるように、これ以降疑問の助詞は再び「か」になります。しかし、古代語と全く同じではないのです。どう違うのでしょうか。

()

それは「か」の**位置が文末**になっていったのです。「念仏するか」(今昔物語集 19 卷 37 話)のように文末の述語に直接「か」の接続する例が見られるようになり、今へとつながっています。「はい」「いいえ」の答えを要求する真偽疑問文は、このような時代的な変遷をたどっているのです。

3 「か」と「や」の違い

第8回では「ぞ」と「なむ」が同じ連体形で結ぶ「強調」であっても、意味的な違いのあることを説明しました。では、「か」と「や」には、どんな違いがあるのでしょうか。

この問題は、江戸時代の国学者以来、何百年も議論されています。しかし、まだ明確なことはわかっていません。89ページにその整理があります。一番注意されるのは、下から10行目の①です。「か」は疑いを表し、「や」は問いを表す、とあります。これから、どういうことをイメージしますか。

()

疑問文と私たちは普通に使いますが、「疑念」と「質問」というのは考えると、別の概念とも言えます。「雨降るか」(雨が降るかな)と自分の内心で考えるのは、「疑念」です。「雨降るや」(雨降る↑?)と人に聞くのは「質問」です。

現代人の感覚では、この両者は一体化して「疑問」という感覚ですが、奈良時代以前はそれが別のものであるという感覚があったという**仮説**です。ただ、これは当時の感覚を再現することが困難で、証明は簡単にはできません。

奈良時代の『万葉集』などの例文からすると、もともと「か」が疑問で回答を求めることを示し、「や」は漠然と問いかけることを示す、のように理解できるかもしれません。

89ページ下から3行目に「古代語の疑問文は、解答要求表現(典型的な疑問文ですね)以外に様々な表現に用いられた」とあります。このあたりから、見直していく問題で、日本語の疑問文の歴史自体を見直す必要があることにもなってきます。

日本語の歴史を見る際には、奈良時代以前のことは、資料もなく、わからないことが多いのです。たとえば、**枕詞**です。これは覚えていきますね。「あしひきの」「たらちねの」「ひさかたの」などが有名ですが、次にどんな語が来るかは知っていますね。

あしひきの()たらちねの()ひさかたの()

これは「山」「母」「光」、皆さん正解ですね。しかし、なぜこういう組み合わせなのか、また、なぜ**訳す必要がない!**なのか、わかっていないのです。「枕詞」をはじめとする上代語の問題に興味のある人は、ぜひN先生に聞いてみてください。

4 史的変遷：成立と消滅

88ページの10行目から説明があります。しかし、これもよくわからないのです。主な**成立**の説が3つありますが、これを説明するだけで、あと数ページ必要です。

現在の有力な考え方では、注釈的な文から出来たのでは、というのがあります。109 ページに「係り結びの成立」の説明があります。「山を**高みか**／夜ごもりに出で来る月の光乏（とも）しき」（『万葉集』290：290 番目の歌）、「山が高いからか／夜中に出てくる月が乏しいのは」というのが直訳ですが、これは「夜中の月の光が乏しいのは、山が高いから（さえぎられている）なのか」という文があり、それが倒置されて、「～か～連体形」という文ができたのではないか、という考え方です。

「山が高い」ことを強調するために「か」で**焦点**を示して前に持って行って、連体形で結ぶ形になったとします。これも、まだ誰もが納得できる説明にはなっていません。

一方、**消滅**はどうでしょうか。下から 9 行目には「院政期（1100 年代）からかげりが見え、中世には衰退の道をたどる」とあります。『源氏物語』が成立してから、100 年くらいでもう衰退するとされます。

まず、「なむ」が最小に消滅します。鎌倉時代の『平家物語』などの軍記物語には「なむ」はほとんどありません。ただ、「ぞ」は残ります。一方で、疑問は「か」が中心となり、それも位置が文末になって、係助詞から終助詞のようになっていきます。「や」は使われなくなります。

また、これも大問題ですが、中世以降、日本語の活用形が変化していきます。皆さんは、古文の文法を習うとき、活用形の名称が変化してことを覚えていますね。何形が何形に変化しましたか。

（ ）形が（ ）形に変化した。

そうですね。已然形がなくなり、仮定形になりました。そして、日本語の活用形において、もう一つ大きな変化があるのを覚えていますか。

（ ）形と（ ）形が同じ語形になる。

現代語では「**終止形**」と「**連体形**」が**同じ形**です。形容詞だと「**美し**」（終止形）と「**美しき**」（連体形）であったのが、ともに「**美しい**」（終止形・連体形）です。

これは、高校では教えないのですが、**連体形に終止形が吸収**されていったのです。良い例が、サ行変格活用動詞の「**する**」とか行変格活用動詞の「**来る**」です。古文では、それぞれ、どういう形になっていましたか。

する：終止形（ ）・連体形（ ）

来る：終止形（ ）・連体形（ ）

これは覚えていてほしいのですが、「**す**」（終止形）と「**する**」（連体形）、「**く**」（終止形）と「**くる**」（連体形）でしたね。多分、暗記させられたことを覚えている人もいますでしょう。

室町時代（1300年代後半から1500年代）の間に、日本語では「連体形」が「終止形」になっていったのです。この説明にもいろいろな考え方があるのですが、それは省略します。ただ、日本語の文末の述語の形の変化と係り結びの消滅は密接に関わっているのは、確実とされます。ただし、詳細な点については、資料の限界もあり、十分な説明ができていません。

もう一度整理すると、「なむ」がまず消えていきます。「や」も疑問の意味では使われなくなります。疑問の助詞として「か」は残りますが、文末での使用となります。「ぞ」も文末の助詞としては「～ぞ」と「断定」の意味で残ります。

そして、第8回で説明した「こそ」は係り結びの働きはなくなるものの、副助詞としての働きを持って、「多くのなかから一つを選び取る」という「強調」の意味で、現代語でも使われています。

5 研究テーマとまとめ

90 ページの研究テーマ、3) の「は」「も」は係助詞か、は、読んでおいてください。これは学者によっても意見の分かれるテーマですが、現代語の「は」は係助詞だとする意見もあります。「彼は5時に作った夕飯を食べた」と「彼が5時に作った夕飯を食べた」の違いがわかりますか。

()

「彼は」なら、自分か誰かが作った夕飯を「食べた」ことになります。

「彼が」なら、彼が作った夕飯を誰かが「食べた」ことになります。

こういう点からすると、現代語でも、係り結びはしないものの（文末の形は変わらないものの）、係助詞は存在すると考えることも可能です。皆さんはどう考えますか。

()

91 ページの4) の係り結びの範囲、は、これも研究途上のテーマです。上代語については、先にも触れたように、奈良時代以前のことは、ほとんど解明することができません。そういう中で、「係り結び」とされるものが、より幅広い使われ方をするものであったのか、ということが研究されているのです。

今回の係り結びの説明は、分量は多くはありませんが、非常に複雑で難解なものになりました。研究途上の部分も多いのです。

要するに、係り結びという現象があって、それが古代語においては、文を作り、コミュニケーションを行う上で重要な存在であったことは明らかです。しかし、そこから先は、わからない点ばかりです。今回は質問も多数設定することが困難でした。その点は、お詫びする

次第です。

最後に課題を出します。今回は、皆さんの興味を持った点を聞きたいと考えています。

課題

①第8回と第9回で、係り結びについて、現在の研究の状況を学習して、どの点に最も興味を持ったのか、という点を、その理由とともに、説明してください。

②課題資料を読んで、自分の意見を述べなさい。

*①と②を合わせて300字程度で書いてください。長くなるのは問題ありません。